

座右の銘

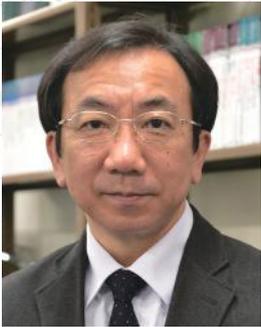


自然体

香西 克之 大学院医系科学研究科 歯学分野 小児歯科学 教授

私はこれといった座右の銘を持ち合わせていません。以前、似たような取材があったことを思い出し調べてみました。2008年の『広大「人」通信』の教員紹介の中に、「好きな言葉は？」との問いで「明日ありと思う心のあだ桜夜半に嵐の吹かぬものかは」と回答した既往がありました。当時は50歳過ぎで、仕事はその日のうちに片付けなければという目標があったのでしょうか。今では催促のリマインドメールが来てから考え始めるこの変わり様。今回は「実るほど頭を垂れる稲穂かな」とも思いましたが「実るほどお腹が垂れる中年太り」の自虐パロディが脳裏をよぎり取り下げました。結局、迷った末の座右の迷(?)は「自然体」に決めました。

自然体はスポーツ選手やタレントも座右の銘に挙げるほど万人にとって永遠のテーマであり理想です。語源は柔道や剣道で両足をわずかに広げて構えるスタンスといわれ、「ありのままにいること」「気負わず、身構えないこと」を意味し、英語では「natural」「be myself」などと表現されます。学会講演や英語の授業では今も緊張します。また意見の違う人と向き合うとつい頭に血が上ってしまいます。忙しいとイライラするし、現代社会を生き抜くには自然体を身につけることが大切とされ、様々な啓発セミナーも開催されています。自然体には実に多くの意味があり、調べれば調べるほど奥深い3文字です。今後も年齢に合わせた自分の自然体(スタンス)を探求し続けたいと思っています。



塞翁が馬

松浦 伸也 原爆放射線医科学研究所 放射線ゲノム疾患研究分野 教授

座右の銘を紹介するようにとのご指示をいただきました。これまでそのような特別な言葉を持ってこなかったのですが、昔、恩師からいただいた「塞翁が馬」が自分にとってはそうだったのかなと思い返しています。研究の世界に憧れて、30代半ばで海外へ留学し、帰国後は生まれ故郷の広島で基礎研究を続けました。放射線の研究はゼロからのスタートだったので苦労しましたが、多くの方に助けてもらって、最終的に原医研でラボを持たせてもらえることになりました。恩師にその報告に伺ったところ、「心配していたが、人間万事塞翁が馬になったね」と喜んで下さいました。いただいた言葉のとおり、その後は良いこともあれば悪いこともありました。しかしトータルでは、大切な人との繋がりができたことや、見聞を広める機会に恵まれたことなど、良かったことが多かったように思います。

昨今、大学を取り巻く環境は厳しいものがあります。2020年には新型コロナウイルスの世界的大流行も起こりました。今、まさに激動の時代ですが、どんな困難な状況でもいずれは好転する 때가訪れると思います。「塞翁が馬」の言葉に込められた希望をもって、今できることを頑張っていきたいと思っています。